木村兼葭堂のネットワークにみる知の交流

近世大坂が生んだ稀代の文人・町人学者として知られる木村兼葭堂。幼少期から絵画、詩文、本草学を学ぶ傍ら、長じて書画骨董を広く収集。その膨大なコレクションは全国に知られ、閲覧・情報交換のために訪れる人びととの交友範囲は多岐にわたった。江戸期大坂を中心に、一大サロンと文人ネットワークを築いた兼葭堂の足跡を辿り、いま学ぶべき知の交流のあり方を探る。

有坂道子
Arisaka Michiko

ありさか・みちこ
1969年生まれ。京都府立大学文学部史学科卒業。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。京都大学文学研究科助手を経て、現在、京都橘大学文学部教授。論文に「市井の蘭学――木村兼葭堂にみる」、「木村兼葭堂の交友と知識情報」、共著に『身分的周縁と近世社会5 知識と学問をになう人びと』（吉川弘文館）、共編著に『完本 兼葭堂日記』（藝華書院）がある。

はじめに

18世紀後半、「大坂を通る者で彼のことを知らない者はいない」といわれるほど、世に名前の通った風流好事の博物家がいた。北堀江の造り酒屋の主人、木村兼葭堂である。兼葭堂は博学多芸な文人で、本草・博物家、画家として知られるのみならず、書籍をはじめとするモノの収集と、際だって幅広い人脈を築き上げた人物として有名である。

彼は自筆日記を残していて、その日に会った人名を書き付けるシンプルな人名簿式日記であるが、現存する19年余分の日記には、約8500名、のべ4万人近い人名が記されている。多い時には一日に20人以上と会うこともあるような、積極的な交際である。

日記からうかがえる交遊範囲は、北は松前から南は薩摩種子島にいたるほぼ全国にわたっており、文人・知識人はもちろんのこと、大名や藩士、中国の画人・僧、オランダ商館長・商館医、朝鮮通信使まで含まれている。現代ではなかば忘れられてしまっている兼葭堂であるが、日記が示す交流の痕跡は、兼葭堂が当時の大坂において人的ネットワークの中心にいたことを示唆してくれる。兼葭堂はなぜこれほど多くの人と関わりを持ったのだろうか。そしてまた、どのような交流を結んでいたのだろうか。

彼の生涯を追うと、単なる興味本位の物好きではなく、学者からも一目置かれる存在であったことがみえてくる。兼葭堂という人物のあり方を通して、18世紀後半の知の交流について考えてみたい。

Ⅰ　兼葭堂と学芸

◉町人兼葭堂

はじめに、大坂の町に住む町人としての兼葭堂を紹介しておきたい。

兼葭堂は、元文元（1736）年、北堀江5丁目で酒造業を営む坪井屋に生まれた。時は8代将軍徳川吉宗の時代である。通称は吉右衛門、字は世粛、号は巽斎、自宅の居室につけた兼葭堂の堂号で知られている。現在、大阪市立中央図書館の南東角に「兼葭堂邸跡」の石碑が建つが、旧宅は正確にはそこよりも西へ100メートルほど行ったところにあった。

造り酒屋坪井屋の主人として、町年寄を20年あまりつとめたが、54歳の時に支配人に任せていた造酒が生産制限を超えたとしてとがめを受け、酒造道具を没収され町年寄の職を解かれてしまう。そのため、親交のあった伊勢長島藩主の誘いを受けて、一時長島藩領川尻村（現・三重県四日市市川尻町）へ引っ越した。しかし、まもなく帰坂して、以後は唐物の筆墨紙硯を扱う文房具商を営み、享和2（1802）年67歳で没した。

大坂商人として見ると、決して順風満帆に進んだ人生ではなかったが、学芸活動という視点で見ればまた別の見方ができる。次に兼葭堂の学芸交流の様子を見ていこう。

◉画家との交わり

兼葭堂は短い自伝を書いており、それによって彼の学芸に対する関心のありどころがあらましわかる。それによると、幼いころ体の弱かった兼葭堂が、まず関心を寄せたのは植物と画であった。

このうち画は、文事に理解のある父のもと、5、6歳のころに狩野派の大岡春卜から初歩を学び、ついで大和郡山の文人画家、柳沢淇園（柳里恭）に手本をもらって教えを受けた。春卜の影響を受けて唐画を志す一方、12歳のころに、長崎から大坂へやってきた画僧の鶴亭を通じて、中国の沈南蘋がもたらした新しい画風に触れることになった。写実的で濃密な花鳥画を得意とする沈南蘋の画風は、花鳥画の世界に大きな影響を与えて多くの南蘋派の画家を生み出すことになったが、兼葭堂は鶴亭によってはじめて京坂の地にもたらされたこの画風をいち早く知ったのである。さらに、翌年には京都で池大雅から山水画を学んでいる。兼葭堂より一回りほど年長の大雅とは、師弟以上の親しい関係で生涯交遊が続くことになった。

このように、兼葭堂は一流の画家に師事してさまざまなスタイルの画を学び取り、多くの画家との交流が生まれている。ちょうど兼葭堂が活動した時期は、大坂で文人画が成長する時期にあたっており、大坂画壇の画家をはじめ、次代をになう若い画家たちも兼葭堂と交わって刺激を受けている。

25歳の時に最晩年の兼葭堂と知り合った文人画家の田能村竹田もそのひとりであり、兼葭堂の画技を高く評価し、もし門下で学ぶことができていたなら、と残念がっている。竹田は、兼葭堂の人柄について「後進の者を推薦するのに言葉を惜しまず、才芸に見るべきところがある者にはかならず心を尽くして交わった」と述べ、兼葭堂が年の離れた若い人材とも対等に接していたことを伝えている。

画家との交流のなかでは、互いに作品を依頼したり贈答し合ったりすることがよく見受けられるが、紀州の文人画家の桑山玉洲は少し違った依頼をしている。兼葭堂にあてた書状のなかで「御預け申し上げ御座候拙画の筋は、先達て申し上げ候通り、いかほど下直（値）にても苦しからず候間、商人方へ残らず節前に遣わされ下さるべく候」、つまりどれだけ安くても良いから、預けておいた自分の作品を節供前までに商人へ売り払って欲しいと、売画の仲介を依頼しているのである。玉洲は、池大雅や兼葭堂との交友を通じて書画の品評とは何かを悟ったとも述べており、兼葭堂が所蔵する書画を見て眼を養ったことも知られる。一方の兼葭堂も、紀州桑名藩儒が所望ということで古琴を斡旋したが、取引が成立しないまま琴も返却されず、甚だ困った状況に陥った時、玉洲に書状を送って取り成しを依頼している。両者が画家という単純な接点を超えて互いを頼み、より深

木村兼葭堂肖像
谷文晁筆　重要文化財
江戸時代の文人画家・谷文晁が兼葭堂の没後、遺族に依頼されて描いたとされる肖像画。その楽しげな表情から温厚な人柄がうかがえる。
所蔵／大阪府教育委員会

花蝶之図
木村兼葭堂筆
紅葉した幹につるをからめて花が咲き、胡蝶が舞う。当時流行した南蘋派の影響を受けて描かれた作品。
所蔵／関西大学図書館

い関係でつながっていることが知られる。

◉混沌詩社

蒹葭堂は18、19歳のころに儒学者の片山北海に経書の読み方を学んだが、漢詩文を好んだ北海の影響を受けて23歳のころから蒹葭堂会という詩文読書の会を開くようになった。

18世紀は、儒学の世界で漢詩文を積極的に位置づける荻生徂徠の古文辞学が盛んになり、漢詩文が大きな流行を迎えた時期である。このころには、生活のゆとりと教養への興味を持つ人びとがしだいに増え、限られた知識人だけではなく、さまざまな身分や職業の人びとが詩文や書画など文人としての素養を身につけるようになっていった。作詩文を楽しむグループの活動も多く見られるようになり、蒹葭堂会もやがて片山北海を主宰とする混沌詩社に吸収され、さらに大きく展開していく。混沌詩社には医者、商人、儒学者、武士（多くは蔵屋敷役人）など多彩な顔ぶれが揃い、大坂を代表する詩社として広く知られるようになった。

のちに昌平坂学問所の教官となり寛政の三博士に数えられた尾藤二洲も、在坂時に混沌詩社に参加したひとりであるが、詩社の主宰である片山北海に関して面白い話が伝わっている。当時京都で有名な儒学者であった皆川淇園と大坂の片山北海と、どちらかに従学しようと考えた二洲は、まず皆川淇園の家を訪ねた。そうすると、淇園は門人が左右に居並ぶなか威儀を正して面会した。次に片山北海の家を訪ねたところ、門前で手拭いをかぶって薪を割っている男がおり、これがすなわち北海であった。二洲はついに北海を師に選んだ、という話である。これは北海が素朴で飾らない人であったことを教えてくれるが、見かけにこだわらず、実を大切にするということにつながっている。混沌詩社の活動も、自由な雰囲気のなかで漢詩文を作り、批評し合うものであり、身分の違いなく仲間としての親しいつきあいが結ばれていたことは大きな特徴である。

◉本草学の世界

蒹葭堂が早くから興味を向けたもうひとつに、植物があった。自宅で草木花樹を育てるほど好きだった植物への関心は、やがて本草学の世界へつながっていくことになる。

本草学とは、薬用となる植物や動物・鉱物を対象とする学問で、今で言う薬物学に近い。蒹葭堂は16歳で京都の本草学者、津島恒之進（如蘭）の門人となり、恒之進の没後は他の門人たちと書状を通じて知識を深め、さらに小野蘭山の門弟となって本格的な本草研究を進めるようになった。小野蘭山は、江戸時代後期の最も有名な京都の本草家で、幕府の招きによって71歳で江戸に下り、医学館で本草学を講義した人物である。

蒹葭堂が本草学の学びを深める上で大きな役割を果たしたのが、同門の仲間たちとの交流や各地の本草学者との情報交換であった。とりわけ重要な機会であったのは物産会である。津島恒之進がおこなっていた本草の会はまだ小さな集まりであったと思われるが、しだいに本草会・薬品会・物産会などと称し、さまざまな物産を持ち寄ってその真偽を見極め、有用性の有無を検討し、知識を交換する集まりが各地で開かれるようになった。物産会は本草や産物に関するさまざまな情報を得るチャンスであり、その交流は学派の別にかかわらず、各地の本草家や本草に興味を持つ者たちが広く加わるものだった。

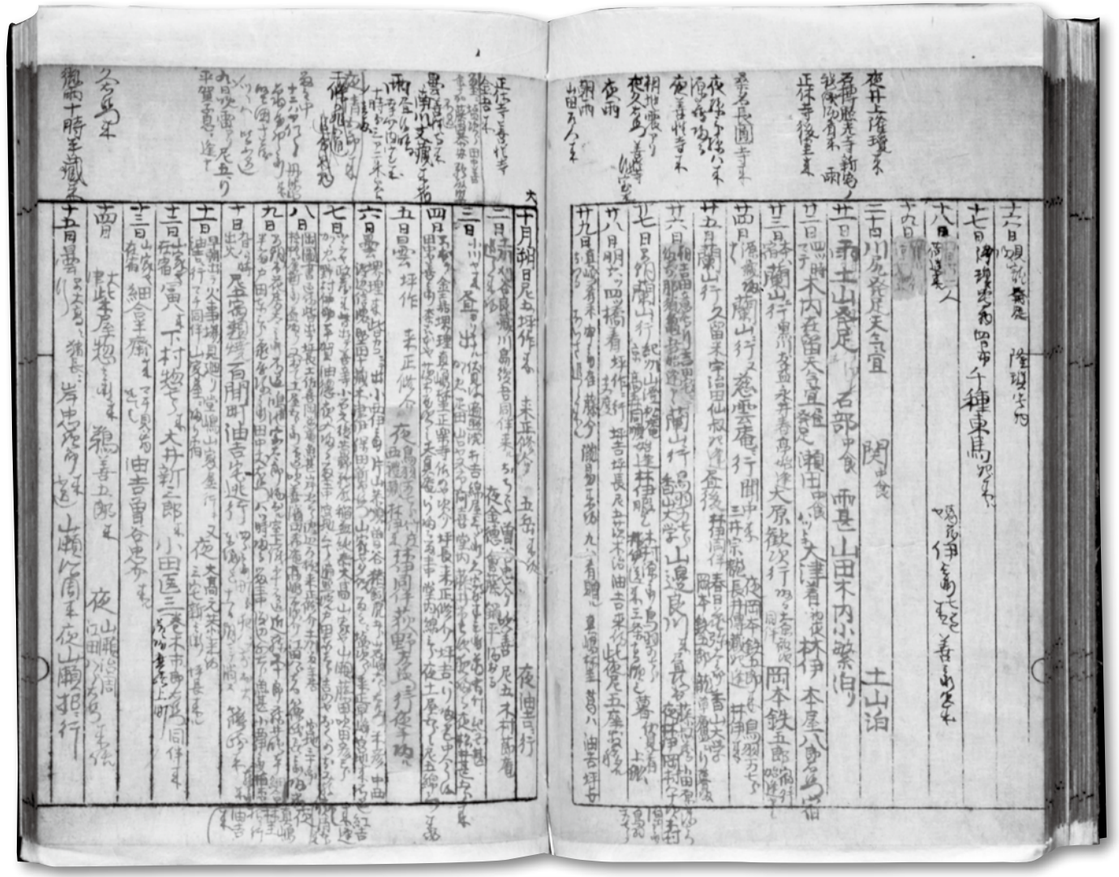
自伝のなかで蒹葭堂は、小野蘭山への従学を「蘭山に従て益名物のことを究む」と記しているが、「名物のこと」とはすなわち、植物をはじめとする諸物産の名前とそれが持つ性質を知ることである。たとえば外国産のある薬草にどのような形状・性質・効用があり、それが日本の何に当たるかを調べることが本草学では重要であった。そうした名物学の手法は、いわゆる薬物学の範囲にとどまらず、人間生活のまわりにあるさまざまな物産、モノへの関心へと広がっていくことになる。将軍吉宗が殖産興業に熱心で実学を奨励したことも、こうした動きの背景にある。物産会の盛行は、さまざまなモノに対する興味関心が多くの人に共有されていたことを示しており、対象とする物産を広げながら博物学的な方向へと進むひとつの流れを生み出すことになったのである。

Ⅱ　蒹葭堂の知のかたち

◉モノを考索する

蒹葭堂はそうした事物の考証をおこなうために、書籍や文物の収集に力を入れた。蔵書に関しては「数年来、百費を省き収むる所書籍に不足なし、過分と云うべし」というほどで、その数2万巻とも3万巻とも言われた。自伝にあげる収集対象は、書籍以外に、日本や中国の金石碑本、日本の古書画や詩文、中国書画、日本および外国の地図、草木・金石・珠玉・虫・魚介・鳥獣、古銭、古器物、中国の器具、外国の異産に及んでいる。

注目したいのは、そこに「奇を愛するに非ず、専ら考索の用とす」「右の類ありといえどもみな考索の用とす、他の艶飾の比にあらず」と書き添えられていることである。こうした物集めは金持



蒹葭堂日記
羽間文庫本
蒹葭堂が来訪者や訪問先を記した日記。日々びっしりと書き込まれた記述から、蒹葭堂の圧倒的な交友関係の広さがうかがえる。
所蔵／大阪歴史博物館

ちの収集趣味と思われがちで、実際、蒹葭堂も世間から「豪家の徒」と見なされることがあった。しかし蒹葭堂が強調するように、これらの蔵書や収集品を「考索」のために活用していたことは確かで、その成果の一端は蒹葭堂の著作『一角纂考』に見ることができる。

『一角纂考』は、蒹葭堂が解毒万能薬として珍重されたウニコール（一角）の原料を確定した書である。当時、一角の原料については諸説あって定まっておらず、蒹葭堂は所蔵する和漢洋の蔵書を調べ、西洋書の『グリーンランド地方地理志』にある図と記述によって、一角が北氷洋に生息するクジラの仲間であるイッカクの歯牙から作られることを明らかにしたのである。この西洋書の記述を信頼した根拠は、他の諸書が伝聞に基づく記述ばかりであったのに対し、実際にその地を訪れ、イッカクを見た人の言に基づく記載であったからであった。こうした考え方は、大坂における学問態度の特徴でもある、自ら実践・経験するなかで物事の真実を見極めるという考え方に沿うものと言える。

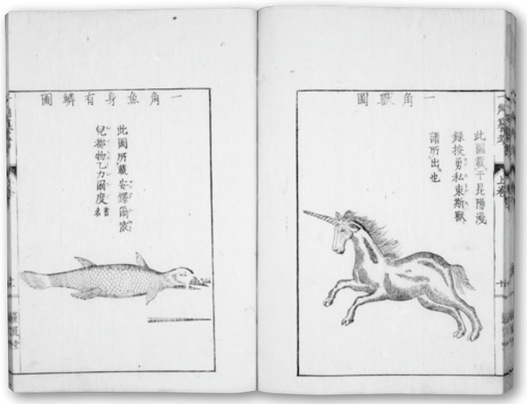
◉蒹葭堂の貢献

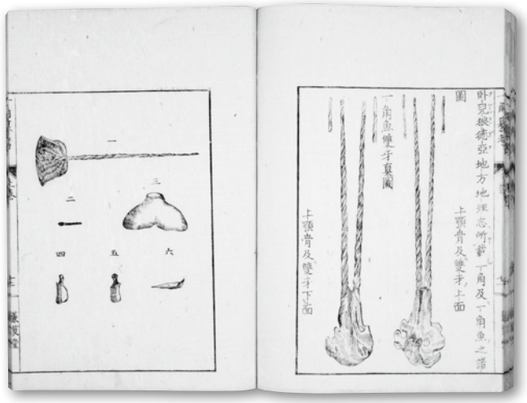
また、『一角纂考』は、江戸の蘭学者大槻玄沢の『六物新志』という著作と合わせて、蒹葭堂版、すなわち蒹葭堂の自費出版で刊行された。大槻玄沢は、『解体新書』で有名な杉田玄白に学び、はじめて蘭学塾を開いて多くの人材を育てた人物で、『六物新志』は一角やサフラン、ニクズクなど6つの薬物について解説した啓蒙書である。

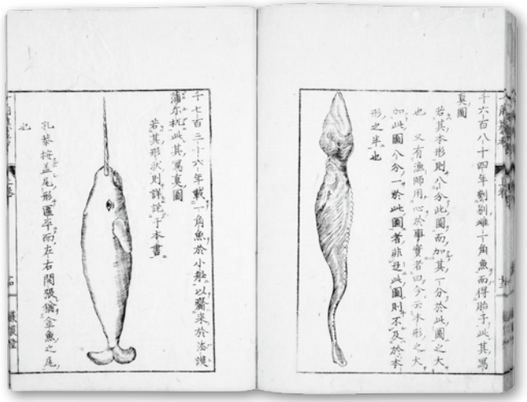
蒹葭堂は『一角纂考』をまとめるにあたり、大槻玄沢に意見を聞き、西洋書の記述の解読を依頼した経緯があり、たっての願いで玄沢の著述を合刻した。蘭学者の宇田川玄随は、蒹葭堂にあてた書状のなかで、「玄沢六物新志も、御世話にて刊行御図り下され候由、感荷（受けた恩を心に深く感じること）同様に存じ奉り候」と蒹葭堂に感謝の意を表している。

今も昔も専門書の出版は簡単ではなく、蒹葭堂は世の中に益するこうした成果を出版助成というかたちで援助した。蒹葭堂が自費出版した書は、自ら校訂・校注を加えた漢籍や知友の著書など二十数種にのぼり、価値ある書籍を吟味・選別して私財を投じて出版していることは注目に値する。

先にもあげた宇田川玄随の書状には、蘭学者の







『一角纂考』
木村蒹葭堂著　寛政7（1795）年刊　蒹葭堂蔵版
蒹葭堂の代表的著作で、クジラの一種であるイッカクについての研究書。大槻玄沢の『六物新志』とセットで刊行された。2段目の見開きの図が『グリーンランド地方地理志』からの引用。
所蔵／早稲田大学図書館

芝蘭堂新元会図
市川岳山画　重要文化財
寛政6（1794）年閏11月11日、洋暦の1795年の元日、江戸の蘭学者たちが大槻玄沢の居宅である芝蘭堂に集まり、いわゆる「おらんだ正月」を祝った時の様子。西洋式の祝宴の卓上にはナイフとフォークが並び、当時の蘭学者たちのサロンの様子を伝える。床の間の一角獣の絵は蒹葭堂からの贈り物だとする説もある。
所蔵／早稲田大学図書館

谷文晁書簡（部分）
文晁は旅先での見聞を蒹葭堂に伝えるべく、たびたび書状を送った。書簡中の人物画は浦賀で見かけた広東省の漂流民の姿を描いたもの。
所蔵／中尾松泉堂書店

間でも蒹葭堂の存在が噂になっており、蒹葭堂が徐々に考索の範囲を広げて蘭学にも及んできていることを江戸の蘭学者は「遙敬」していると言い、蒹葭堂の「発明」「卓論」「新説」などをぜひ聞かせてほしいと述べている。西洋書を含む豊富な蔵書を活用して考証する蒹葭堂の知識は、玄沢や玄随のような蘭学者が学説を立てていく上においても、有益で刺激に富むものであったことを教えてくれる。

◉秀でた収集力

蒹葭堂の膨大なコレクションは彼の収集力に支えられたものであったが、その積極的な収集活動を物語る次のようなエピソードがある。松前藩の役人が上方へ来た時に、松前にも入ってきていない蝦夷織物や蝦夷の産物などがかえって上方に多くあり、内々に調べたところ、それらの品々を引き受けている町人が木村吉右衛門、つまり蒹葭堂だったというのである。北方で交易された品が東回り航路で南部を経由して直接上方へ着船しており、蒹葭堂は北方の島々や異国への道筋・方角を詳しく描いた絵図も所持していて、松前藩の役人はこのような絵図が他国にあっては宜しくないので、いろいろ手段を講じて手に入れようとしたが、結局、蒹葭堂から入手することはできなかったという。

また、蒹葭堂は北方探検家として知られる最上徳内に、北海地図を見せてほしいと依頼してカラフト島の図を見せてもらっているのだが、徳内から、これは自分の手元から流布しては宜しくないので心得て見てほしい、と念押しされている。徳内はさらに、クナシリ・エトロフ・ウルップ3島とその先2島の図や、蘭学者の前野良沢が書いた『柬察加志』、ロシア人の描く北海図なども追って進覧すると述べており、蒹葭堂が非常にデリケートな情報も含めて、蝦夷地の情報に最も詳しい人物から直接情報を得ていることがわかる。

この二つの事例からだけでも、蒹葭堂がいかに旺盛な収集活動をしていたかを知り得るが、それは蒹葭堂の貪欲ともいえる知識欲、並外れた求知心を示すものでもある。

◉知識・情報の「互恵」

最上徳内の例が示すように、蒹葭堂のもとに集まる知識や情報は、友人・知人からのルートが重要であった。蒹葭堂の周辺は彼の興味関心をよく知っており、各地から蒹葭堂に情報を寄せている。

江戸の文人画家の谷文晁も、多くの文物や情報をもたらしており、蒹葭堂が好みそうなモノを贈ったり、旅先での見聞を書状で伝えたりしている。一通の書状のなかで多岐にわたることがらが書き込まれており、たとえばある時には、蒹葭堂へ唐山（中国）女服図、唐鳥図、慶安元年製の墨、古写本などを贈り、自分が見た宮本武蔵の「古松之鷲」の図や中国唐末の画巻に書かれた跋文について報告し、浦賀で見かけた広東省の漂流民の姿を絵に描いて送っている。逆に、蒹葭堂から文晁へは、書籍を贈ったり、法帖を貸したり、写本を調達するなどの便宜をはかっている。あわせて、共通の文人仲間の動向を伝え、言づてや荷物の受け渡しの依頼などもおこなっている。煩雑に思われるほどの内容であるが、考索、考証のためにはより多くの知識・情報が必要であり、蒹葭堂のもとには日々こうした新しい多くの情報が入ってきていたわけである。

と同時に、こうした知識・情報の収集が、互恵の関係に基づいている点にも注意しておきたい。一方的な依頼なのではなくて、相手の希望に応え、相手のために自分ができることを提供しあう関係である。蒹葭堂のコレクションは、互いの信頼に基づく互恵のあり方のなかで蓄積されてきたとも言えよう。

◉開かれた「知」

蒹葭堂には、自ら定めた「草堂規条」という決まりがある。そのなかで、自分が堂を設けたのは学術研究のためであり、蔵書は同好の人びとともに利用し、人に貸すことも厭わないと明記している。コレクターのなかには収集した書籍を秘匿し、見て楽しむだけの者も多いが、蒹葭堂は「（蔵書を）観玩の具と為すは余の慚じる所なり」と言い切る。また、装丁が美しいかそうでないかなどは問題でなく、ただ文字が鮮明かどうかだけを基準に書籍を集めたとも言っている。蔵書を学問に活用すること、それが蒹葭堂の集書の最も大切な目的であった。

そのため、蒹葭堂の蔵書・収蔵品を利用したいと願う多くの人が蒹葭堂を訪れた。蒹葭堂の書状に来訪者について記した一文があるが、「水戸儒臣立原甚五郎始め四五人、内々御用にて上坂有て、拙家収蔵の品とも書写の命も御座候、隣町に旅宿致され日々拙家へ過訪にて、書写致され候」とある。これは、水戸藩による『大日本史』の編纂事業のため、彰考館総裁の立原翠軒や画工の木村庄蔵らが、蒹葭堂が所蔵する古文書類を調査に来た際の様子を書いたものである。蒹葭堂の収集品の重要性が広く知られており、蒹葭堂がそれらを公開し、利用に供していたことを改めて確認できる。

この時に蒹葭堂と知り合った立原翠軒は、その後も交流を続けていた。2年後、蒹葭堂へ出した書状には、地図を借用していることに対する礼とともに、常陸の北海に現れた「異船」の情報を、知り得た船主・船員の挙動に触れながら詳しく報告している。両者の間にもまた、互恵の関係を見出すことができよう。

蒹葭堂の学芸活動の一番根底にあるのは、純粋な知への欲求であった。たしかに、蒹葭堂のあり方は特異ではある。しかし、蒹葭堂に顕著なように、18世紀後半の知識人たちは個人としての活動以上に「横のつながり」を大切にしている。交友によって結ばれたネットワークは、互恵の特徴をもちつつ、つねに双方向で情報のやりとりがなされ、それによってさらに強いつながりが生まれている。専門、立場、年齢、そうしたものを超えて人びとが結びつくところに、新しい知の発展の可能性が生まれてくるのではないだろうか。

「草堂規条」
自筆本『蒹葭堂記記』より。「草堂規条」には蒹葭堂蔵品の閲覧規則が記されている。
所蔵／辰馬考古資料館